

山口県緩和ケア医師研修会に参加して

印象記：山口県立総合医療センター 林 めい

2017 年 9 月 23・24 日の 2 日間にわたり、山口県総合保健会館において山口県緩和ケア医師研修会が開催された。本研修会は、2007 年に定められた「がん対策推進基本計画」に則り、山口県、山口県医師会で共催されている。参加者は、PEACE (Palliative care Emphasis program on symptom management and Assessment for Continuous medical Education) というプログラムに従い、7 名のファシリテーターのもと研修を受けた。

講義では緩和ケアの概論から始まり、疼痛、呼吸困難、消化器症状、せん妄の評価と治療などの実践的な内容、つらさや精神症状の評価とケア、コミュニケーションなどの必要とわかっていながらもなかなか余裕が持てて学べていない内容について、改めて知識の整理をすることができた。また、それぞれの症状について体系的に学べただけでなく、例えばがん性疼痛の評価と治療の講義で「中等量以上のオピオイドを使用して十分な鎮痛が得られずオピオイドの種類変更を検討する際は専門家にコンサルテーションする」というように、相談のタイミングについても説明いただき、これからはもっと自信を持ってコンサルテーションできそうだと感じた。

グループ演習、討論においては、がん性疼痛



の事例検討と、療養場所の選択と地域連携について行った。グループ内には一次から三次まで各規模の医療機関で勤務する医師が参加しており、コンサルテーションできる科が揃っていなかったり地域連携部門がなかったりと、普段相談することによって解決していることを自身で病院の規模によってできること、しなければならないことが異なってくることを実感した。

2 日間の研修において、私の印象に強く残っているのはロールプレイング研修である。オピオイドの開始、コミュニケーションについてのロールプレイングを行ったが、それぞれに気づき、学びが多くあった。オピオイドの開始については、医師役として知識や余裕の不足も感じたが、患者役として医師役への質問や実際に患者が取らざるであろう行動の予測がついておらず、想像力の不足を思い知った。また、コミュニケーションにおける進行がんの告知では、医師役として情報提供することに一生懸命になってしまい、患者役の反応を見たり、不安を和らげる言葉を投げかけたりする余裕を全く持てなかった。同じグループの方のロールプレイングを観察したところ、医師役として患者役を気遣いながら会話しているだけでなく、患者役としても実臨床で見られるような反応を演じら



れており、患者の気持ちを想像できる力がそのまま患者の気持ちを気遣うことのできる力となっており、診療における余裕を形成する一角となっているのだろうと考えた。経験豊富な先輩方の診療の姿勢や客観的なアドバイスを心に留めて、患者を気遣える余裕を持ちたいと痛感した。

2 日間の研修を終えてプレテストを復習したところ、今までの知識の不正確さを痛感した。本研修会で得た知識やアドバイスを糧にして、これからの診療に活かし、患者や患者家族に寄り添って医療を行っていききたい。

最後になりましたが、本研修会企画責任者の末永和之先生(すえなが内科在宅診療所)をはじめ、



ファシリテーターの立石彰男先生(宇部協立病院)、松原敏郎先生(山口大学保健管理センター)、中村久美子先生(山口県立総合医療センター)、篠原正博先生(しのはらクリニック)、上田宏隆先生(山口赤十字病院)、亀井治人先生(山口宇部医療センター)、ならびに企画、運営をさせていただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

